平成 27 年度　第２回　鶴岡市立藤沢周平記念館運営委員会（会議概要）

○日　時　　平成 27 年 12 月 10 日（木）午後 1 時 30 分～16 時 00 分
○会　場　　荘内神社　参集殿
○審議事項　１　報告
　　（１）平成 27 年度運営状況について
　　２　協議
　　（１）第 10 回企画展について
　　（２）第 11 回企画展の進め方について
その他
　　３　その他
○出席者委員
　遠藤展子、遠藤崇寿、湯川　豊、鈴木文彦、栗原正哉、犬塚幹士、髙山邦雄、堀　司朗
○欠席委員　東山昭子
○市側出席職員
　教育委員会教育部長　小細澤　充、教育委員会社会教育課長　佐藤正哉、
　教育委員会藤沢周平記念館長　鈴木　晃、同館主査　三浦眞紀、同館専門員　成澤万寿美、
　同館専門員　進藤恵理也、同館嘱託学芸員　齋藤冬華
○その他出席者
　髙橋吉弘、穴澤　亮（運営支援業務受託者）
○公開・非公開の別　　非公開
○非公開の理由　　顕彰する個人の情報を含むため
○報告
（１）平成 27 年度運営状況について
　◆内容
　　平成 27 年度入館者、書籍等販売実績及びソフト事業実施状況について報告
〈意見など〉
・作品題名書道展、前からやってもらいたいと思っていた。実現してもらいありがたい。すぐに入館者数に反映するということはないとは思うが、長く続けていくうちに周知がいきわたれば、見に来る人も増えるのではないかと思う。長い目でみてやってもらいたい。
・館内朗読会の開催時間、参加しやすい時間帯を色々試しながら、決めて行くようにしたら良い。

○協議
（１）　第 10 回企画展について
　◆内容
　○趣旨：『霧の果て　神谷玄次郎捕物控』を対象作品として、自筆資料や参考書籍、また主人公の職業である定町廻り同心にかかわる資料を展示し、作品への理解を深め、より藤沢作品に親しんでもらう展示を目指す。

○会期案：平成 28 年 4 月 1 日（金）～平成 28 年 10 月 4 日（火）　約 6 か月間
○企画監修者案：遠藤崇寿氏
○展示構成　資料により展示構成案を説明
○図録　①名称　企画展名称に同じ
　　②発行日　平成 28 年 4 月 1 日（金・会期初日）
　　③規格　　既企画展図録と同様
　　④内容　　企画展内容の紹介
　　寄稿：遠藤展子氏
　　寄稿：竹内誠氏（東京都江戸東京博物館館長）
　　インタビュー：　佐生哲雄氏（松竹プロデューサー）
○ミニギャラリー：『霧の果て　神谷玄次郎捕物控』の作品世界に関連する内容
○関連イベント　①朗読会
　　②館内朗読会
○広報　　①ポスター（１，１００部）・チラシ（４０，０００部）
　　②市広報・プレスリリース

〈意見など〉
・せっかくテレビでやったばかりなので、権利関係とかが難しいかもしれないが、役者の人達の顔とかがどこかにあった方が良いと思う。今回「神谷玄次郎捕物控」を取り上げたとすると、良く映像を見ていた人、見てなかった人、いろんな人がいるだろう。入館した時にぼんやり見ていた人の中に、「ああ、あれだったのか」という人が多分いるような気がする。よくあるような、昔の映画のポスターとかをたくさん貼ってあったりするとちょっと安っぽく見える部分もあると思うので、そのバランスがすごく難しいと思うが、そういう要素も入れておいた方がいいように思う。
・同心の衣装は、どこから見てもすぐにわかる。高橋光臣氏は、同心の衣装を非常にうまく着こなしているので、全身像を出したら良い。同心は、侍の士分の下、足軽のちょっと上。与力より上が侍。要するに、同心は格好良さそうに見えて差別の対象。だから、同心の位置付けというのが、この際重要になってくるし、「神谷玄次郎」の原作は、差別される側の人間である同心というものの地位を非常にうまく使っている。また、武士、武家の事件には手が出せないのだが、そこのところを藤沢さん、非常に綺麗に、うまく扱って書いているので、その辺を注意して。
・警察機構の最前線みたいに格好良いだけではない。南町奉行所にいるのは 50 人くらい。つまり南と北で 100 人ぐらい。江戸の当時の人口は、100 万人。ほとんど、警察機構がないと一緒。そこのところを読者に分かってもらうことが、非常に重要。それでちゃんと治められていたという江戸時代の不思議。だから下っ引きが活躍する。
・下っ引きが活躍するような小説はあるけども、本当はすごく下っ引きの評判は良くない。賄賂を要求したり、悪い奴に近い。それについては、あまり藤沢さんが強張していないから、そこはいい。
・藤沢さんは、同心の弱い立場っていうのをちゃんと全部知っていて書いていることは確か。

でも、そういうことは使ってない。自分の父親の事件を追及するときにそれにずっとぶつかり続ける。その辺を配慮してもらうといい。

・ウンスンカルタ、持っているので貸せる。並べると絵が面白いからみんな驚くと思う。

・江戸の警察機構というのをちゃんと等身大に見せながら、同心の活躍とか、岡っ引きの活躍が出てくると良い。だから、この間のテレビを十分使ったらいいのではないか。岡っ引きの中村梅雀氏、実にその格好で、向こうから来ただけで分かり面白い。

・テレビのスチールを使うのは、熱心な読者でない人にはとっても入り易いが、あまり取り入れすぎると、ちょっとずれてしまうのではないか。逆に、ギャラリーとか、廊下をうまく使うという手はないか。

・同心ってすぐわかるような、あの着方、衣装も差別。つまり、普通の侍じゃないと言っているようなもの。同心は勿論両刀差せるが、実際捕物やるときは十手しか使わない。特別な許可がなければ。めったに刀は抜けない、制限がある。三田村鳶魚を読めばそういうのが出ている。

・ストーリーマップのところだが、この作品だけではなく、本当に藤沢さんの地図は正確だった。それを見に来てくれた人、あるいは図録を読んだくれた人にも伝わるような、ただこういう事件があった、ということだけじゃなく、一部引用を組み合わせるとかをした方がいいように思った。この作品だけではないが、ここは舞台がすごく限られているので、熱心な読者は切絵図を隣に置いて読むととっても面白いし、よくわかると思うが、そういう読み方もできるということを、何らかの形で紹介した方がいい。

・各編の説明とかは、捕物帳だからネタバレになるわけにはいかないし、なかなか苦労すると思うが、主人公とか、各編の核になるような、人間の情みたいなもの、例えば「酔いどれ死体」アルコールに溺れていく人間の悲しみみたいなものとか、そういうとこで、うまく引っ張ってタネ明かしにならないようにしてほしい。

・「酔いどれ死体」では、仙台藩蔵屋敷が出て来てそこで倒れている。実際に見てきたように書いている。実に地図を頭の中に思い浮かべながら書いている。

・最初の出版社は双葉社。『出合茶屋』というタイトルにしたのは編集者がちょっと色っぽい感じを出した方が売れると思ってそうしたのだろうか。普通に考えればやっぱり『霧の果て』、全体を通す。文庫にする時は直している。どうして『出合茶屋』にしたのか。結構、藤沢さんの作品の中では色っぽいものが多い作品なので、そういう面を出したいというのが、出版社側の意向にあって、藤沢さんが、まあいいでしょうといったのか。でもやっぱり、全体を通せば『霧の果て』ということで、文庫の時直している。

・江戸の与力とか同心とか、あるいは目明しっていうか、そういうテーマというか主人公にした作品は、ほかの作家もずいぶん書いている。その中でもとりわけ藤沢さんの「神谷玄次郎」、これは文句なく面白い、楽しい作品。私の大好きな『風の果て』それから「霧の果て」、題名がいい。そう思うので、これを取り上げてもらって大変ありがたいと思っている。なぜ、面白いかというと、神谷玄次郎の人柄、性格と言うか、過去に何かがある、というようなこと、それが最後に解決される。その中で色々な事件と遭遇しながら、剣の達人であり、そして、非常に破天荒な生活をしている、そこがいい。女性、お津世さんもいい。目明しの、脇役と言うか、その人達もなかなか面白いと思う。展示するにあたって

は、そうした人物の膨らみを出来るだけ出してほしい。

・藤沢さんにしては、玄次郎とお津世の関係で、玄次郎はすごく悪ぶっている。藤沢周平自身が、精一杯悪ぶっているのがあれだと思う。ほかにはないのではないか。お津世に対して、ほとんど捨て台詞の連続。でも、そういうのは難しいから出さなくてもいい。

・小説を読んでいると、一番興味あるのは、奉行とか、与力とか同心とか。城下町の家中の普通の身分とはまた別の身分の違いが正直言ってわからない。同心、目明しというのはどういう地位の人かっていう何かひとつ、説明してもらえれば大変うれしい。

◇協議結果◇

・俳優の高橋光臣氏の同心姿の写真も展示に活用する方向で進める。

・ストーリーマップは、場所を示すだけではなく、作品との繋がりも分かるように見せる。

・各章の説明に当っては、物語の核となる人物の心緒にも触れる。

以上を参考にして、なお、展示内容を監修者と詰める。

（２）第 11 回企画展の進め方について

◆内容

〇企画展対象作品：『龍を見た男』

〇会期：平成 28 年 10 月 7 日（金）～平成 29 年 3 月 28 日（火）

以上を提案

〈意見など〉

・没後 20 年は平成 29 年 1 月なので、没後 20 年の企画を 1 月から始めるということにするのがいいのではないか。

・1 月 26 日が没後 20 年で、12 月 26 日が生誕 90 年になるので、1 年を通して没後 20 年というのをやったらどうか。ほかの催事とかは、命日を基準に没後 20 年ということですでに動いている。そうすると、記念館だけ命日が関係なくなるので、この企画展を短くしたらどうか。

・「神谷」を延ばすということはだめか？

・没後と生誕企画展を 11 回と 12 回に分ければいい。

・没後 20 年記念というのは、そういう時間が経ったのだというアピールの機会にはなると思う。だから、ちょっとお祭り騒ぎにやった方が良い。

・没後 20 年記念企画展の内容を 2 月ぐらいに決めないといけない。館長が何回か遠藤夫妻と相談して考える。それで必要があれば、すぐにまた会開く。それ、とても大事だと思う。

◇協議結果◇

・第 10 回企画展会期を 12 月末まで延長し、没後 20 年に合わせ、平成 29 年 1 月から没後 20 年記念特別企画展を開催する。

（３）その他（事業・運営に関する意見）

〇朗読会・講演会の会場について

・朗読会は、文化会館みたいな大きい会場ではやらない方が良いと思う。以前、篠田さんに

も言われたが、講演会ならまだ良いが、あまり広いところだと朗読はやりにくいみたいだ。朗読劇とかともまた違うし。

・イベントを新文化会館でやったとして、記念館のすぐそばではないので、来た人が記念館にも足を運んでくれのかが、心配だ。記念館の事業として無料でやるわけなので、記念館にも来ないようでは困る。

・記念館でやることはそのままいつも通りやって、文化会館開館記念事業として市で、藤沢周平関係で何かやってもらえるのであれば、それは一番ありがたい。

・没後 20 年、生誕 90 年のスペシャルと、文化会館のオープンのスペシャルっていう意味合いでやってもらえれば一番いい。

○他施設における展示について

・今まで 5 年間、いろんなパネルとか資料とか整理してきたので、それを、鶴岡以外のところに貸し出しをして、ミニイベントみたいなのも開催しながら、記念館や藤沢先生の作品の紹介できるような、他のデパートかどこか催事場とか、そういった場所などとの連携は考えられないか。

・八重洲ブックセンターでは、一週間ぐらいの展示や物販もやっている。向田邦子さんの 27 回忌を、去年 1 週間くらいやった。その時、真ん中に居間というのか、椅子を置いたり、向田さんが着てたドレスを置いたり、本をたくさん出して自由にお読みください、みたいなのと、写真パネルとかをやっていた。ただ、１日誰かがいないと、展示物を持っていかれる。八重洲のスタッフも少ないから、付いていられない。スペース的には１００人位は入れるので、自由に使ってもらってかまわない。

・確かに、今までのものを上手く使いながら、パッケージにして巡回展とかできると良い思うが、図書館みたいなところでできるものとか、そこそこのところでできるものから、なかなか難しい。文学館となるとちょっと難しいかもしれないけど、できる場所は結構あると思うので、研究しながらやっていければ。

○入館者対策について

・せっかくの施設なので、入館者を増やしたいと思う。それにはＰＲも必要。１年１回ぐらい高校を回って、高校生に何とか見せるっていうことが必要なのではないか。せっかくこれだけ良い資料もあるわけなので、何とか、もう少し頑張って入館者を増やしていくように考えてほしい。

・考えてみると、鶴岡市民の人に来てもらうということも、非常に大切なことなので、各地区公民館や高校を回ってみたらどうか。

・出張展示は難しいと思う。記念館に来なくなってしまわないか。

・出張展示は、記念館というものを知ってもらうひとつのきっかけとしては有効。例えば、こういうことを藤沢さん書いていますよ、記念館に来るともっとありますよ、と紹介すれば、足を運んでもらうきっかけづくりになる。

・藤沢周平を知らない人もいるから、それはきっかけづくりになる。

・鶴岡市内で、藤沢周平さんの本がどれぐらい売れているのかが掴めないと、読者が本当に

いるのかどうかがわからない。意外に、市民の来訪者が少ないっていうのは、もともと読んでないという可能性は高いのだと思う。もし読んでいれば、本当に市の真ん中なので、ちょっと足を運ぼうかという人がいると思う。ずっと低迷しているっていうのは、読んでいる人が少ないのでないかということも推測のひとつとしてあるので、年間に売れる本の数を調べた方がいいかもしれない。各主要な書店でデータだけ挙げてくれればいいので。それによっては、イベント的な対応よりも、とにかく、本を読んで下さいと訴える方が先になるなら、その方法を考えるためにもちょっと調べてほしい。今年１年で藤沢周平のものがどのぐらいなくなったのかというの、ちょっと知りたい。

・図書館の貸し出し数も調べた方が良い。
・子どもは、きっかけを与えれば読む。高校生の作品題名書道展みたいに。今は中央高校の書道部だけだが、もっと色んなところでできれば。書道部だけでなくてもいいのかもしれない。限定してしまうと、きっかけとしては、すごく少ない所にアプローチしてるだけになってしまうので。
・記念館の建物自体がわからなくて、神社にたずねる人が多いと聞いた。
・初めは、目立たないように、ということで、藤沢先生の人柄に沿った形で、ということで設計に配慮してもらった。
・建物が派手なのは困るが、道順がわからないのは困る。
・即効性のある切り札なんかはないから、ゆっくり考えていくしかない。急に増えることは実際ない。
・本当は、気候の良い時に、来館者をもっと増やさなくてはいけない。例えば、東京事務所とかに、もっと協力してもらうということなどはできないか？

＊その他で出された意見を考慮しながら、今後の運営にあたる。

◎運営支援業務者より

・企画展の内容など色々検討されているが、最終的には、やっぱりみなさん集客っていうところに繋がっていかないと、と考えている。我々も、色々、施設を手がけている中で、今日の話し聞いていて、東京にある施設との連携といった形で企画ができればと思った。例えば、江戸博の竹内館長の名前が出ていた。ポスターとかは江戸博にも送っていると思うが、私ども、江戸博も関わっているので、年末これから伺う時にこちらからもＰＲや協力をお願いできる。そういう人脈的なことの協力もできる。それから、今度、ＮＨＫの放送博物館がこの１月 30 日にリニューアルオープンする。昔のドラマのとかもまた作るので、今、台本や何かを記念館で展示しているということを周知できればとも思う。例えば、告知ポスターは入口のところに置かれているが、結構見逃していることがあるので、展示の中にスポットのアテンション入れてもらうとかそういうことできないかと。そうすれば、ＮＨＫさんの資料が地方のそういうところにもちゃんと展示されているということにも逆に告知になる。もし、そういうことを相談して許されればお話ししてみようかなとか、そういう地道なところで少しでも認知度と質度を上げられるような努力をしていければな、と思っている。